国際演劇交流セミナー 2016

International Theater Exchange Seminar 2016

ごあいさつ

一般社団法人日本演出者協会 理事長
流山児祥

1990 年代より近隣の韓国、中国の演劇人との交流、さらには東アジアの国々との演劇交流を日本演出者協会は重ねてきました。また、1999 年からは文化庁による本格助成のもと『国際演劇交流セミナー』を通年で開催するようになり、世界各国の演劇人を講師として、ワークショップ、レクチャー、シンポジウム、リーディング等を連続的に開催しています。
『国際演劇交流セミナー』は、前理事長和田喜夫（当時事務局長）と一緒に立ち上げ、現在まで 17 年間開催されている協会のメイン事業の 1 つです。この事業を立ち上げた動機は「世界の同時代演劇をもっと知りたい」というわたしたち演劇人の根源的な衝動からでした。世界の《身近な他者》との「出会い」を求めて始めた事業です。

『国際演劇交流セミナー』は 17 年間にわたって韓国、中国、台湾、アジアの国々、カナダ、オーストラリア、東欧、北欧、アフリカといった 60 か国以上の国々の演劇人と交流し深く学ぶ機会を継続中です。当初から欧米中心の企画ではなく、日本で余り知られていない様々な国々との交流・紹介を目指しました。なぜなら、世界には多様な演劇が存在しているからです。世界の多様な「現在」を、演劇を通して知り他者と交流する、それが『国際演劇セミナー』なのです。

これで 140 回 60 か国近い国の演劇人との『国際演劇交流セミナー』を実施したことになります。招聘した講師の多くは各国の優れた劇作家、演出家、俳優、舞台美術家、演劇教育者などです。そんな演劇人の言葉がずっしり詰まった 201 6 年度の年艦です。この年鑑が、日本の演劇人にとって素敵な「世界」との「出会いの書」になれば幸いです。

すぐ隣の国にいる《身近な他者》との出会いの中に演劇は豊かに存在しています。パレスチナの友人が語るように「演劇は社会にとって必要不可欠なモノ」なのです。そんな《身近な他者》の熱いメッセージをあなたに届けます。世界には、いろんな演劇があるのです。この年鑑で「いろんな演劇」との素敵な出会いがあなたに生まれることを願っています。ありがとう！

ウェールズ特集

【INTRODUCTION】

「あなたはいつも誰かとつながっている」自己探求のための５日間ワークショップ
SONS AND DAUGHTERS

企画：篠本賢一

「マグダレーナ・プロジェクト」という芸術団体を知ったのは、上方舞で活躍されている吉村桂充さんにご紹介頂いてのことだ。吉村桂充氏は、世界中で行われている芸術活動「マグダレーナ・プロジェクト」に近年しばしば参加し、日本の表現者として紹介されている。「マグダレーナ・プロジェクト」は、今回の招聘講師でウェールズ出身のジル・グリーンハーフ氏が、1986 年に設立した現代演劇における女性の国際ネットワークである。ヨーロッパをはじめ、アフリカ、南米、アジアなど広範なネットワークをもち、「フェスティバル」を開催している。ジル・グリーンハーフ氏は、自ら演劇作品を創造する一方、「マグダレーナ・プロジェクト」の企画創設者として各国 をめぐり、それぞれの地域の問題の個別性と共通性を広い視野で考察しつつ、演劇人として、女性として、生きていくことの問題に対し提言を行なっているという。

ジル・グリーンハーフ氏は、ワークショップ『DAUGHTERS』を各地で行っているが、このワークショップは、参加者を女性に限定しているため、国際演劇交流セミナーの条件には、そぐわないのではないかという懸念があった。しかし、ジル氏との事前の交渉の中で、世界で初めて男性も含めた『SONS AND DAUGHTERS』という新しい企画となったことは、今回のセミナーにおける大きな成果であったと自負している。ジル氏にとっても今回のセミナーは、自らの方法と理念を検証する機会であったはずだ。開催直前に、ジル氏は受講者に向けたメッセージとして、「参加者は、自身の母親や父親、または娘や息子たちとの関係を探求します。己の個人史に光を当て、そこに向き合う勇気をもったパフォーマーのためのワークショップです。参加者は、自身の母親や父親、または娘や息子たちとの関係を探求することになるでしょう」と発信した。このような個人の体験を重視する方法は、リー・ストラスバーグのものに共通する部分が多いのかという先入観を抱いてしまった。日本において、所謂「メソード演技」は、一部に強い支持者があるものの、演技者全体の支持を集めているとは言い難い状況の中で、どのような展開になるのか、興味深くその行方を追ったのも事実である。とは言え、ジル氏及び「マグダレーナ・プロジェクト」に関心を抱いた要素として、その人脈がエウゲニオ・バルバに繋がっているということでもあったので、彼女の理念、活動が、バルバの方向性に対してどのような整合性があるのかということも興味深く感じていた。しかしながら、バルバという総合的な視野を持った世界的な演劇人との関係を想像すると、ジル氏の行なっている活動もある特定の対象だけに向けられた偏ったものではあるまい。そう信じて、彼女の来日を待つことにした。

ワークショップ『SONS AND DAUGHTERS』は、私の想像をはるかに超えた素晴らしいものであった。また、偏りのある少数者を対象にしたものでもなく、まさにトータル演劇といえるような演劇のさまざまな要素を内包したものであり、受講生だけでなく、私にとっても大きな体験となったことを報告したい。しかし、このワークショップは、会場の中で、同時多発的に進行するものであるので、会場で起こった全ての事象を記録することは不可能であり、どこまでその成果を報告できるかについては、いささか自信のないところだ。また、受講生の個人的な体験を題材にしていることから、その匿名性を確保する上でも、詳細を報告できないジレンマがある。どうかそこのところをご理解の上、お許しいただきたい。

ウェールズ……ヨーロッパの主権国家である通称イギリスは、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの四つの小国の連合。

【 in 東　京 】

2016 年 10 月 12 日(水) ～ 16 日(日)　　会　場：芸能花伝舎（B1a）

ワークショップの準備

1．参加者は、自身の歴史を振り返るために物語と品物を集めなければなりません。例えば、家族の写真や記録となる書類、絵、記念品、相続品など。

2．参加者は、パートナーを選ばなければなりません。それは、ワークショップには不参加の参加自身の母親／父親か娘／息子です。そして、かれらに対してワークショップ実施中に電話、スカイプ、メールなどでコンタクトを取れるようにしておかなければなりません。

3．全日程参加者のみ対象と致します。遅刻、早退は基本的に認められません。

■　10 月 12 日（水）17：00 ～ 21：00　会場　芸能花伝舎（B1a）
ワークショップ　『SONS AND DAUGHTERS』1 日目　講師　ジル・グリーンハーフ

講師、参加者の自己紹介のあと、導入として、身体のリラックスが精神のリラックスにつながる意図として、それぞれがストレッチなどでウォーミングアップする。
初日は自分が母親に何を求めているかを自動手記し、そこに羅列された文から本質的なものをピックアップし、短くて心に響くストーリーへとクオリティを高める作業をする。

■　10 月 13 日（木）17：00 ～ 21：00　会場　芸能花伝舎（B1a）
ワークショップ　『SONS AND DAUGHTERS』2 日目　講師　ジル・グリーンハーフ

まずエチュードとして、一人ずつ観客の前で簡単な動きとセリフを使って、理想的なコミュニケーションとは何かが実習された。そこで最も重要なことは、観客をコントロールするということである。
後半はひとりひとりに机が与えられ、思い出の品々を机の上に並べ、効果的なレイアウトを探求した。

■　10 月 14 日（金）17：00 ～ 21：00　会場　芸能花伝舎（B1a）
ワークショップ　『SONS AND DAUGHTERS』3 日目　講師　ジル・グリーンハーフ

まずフィジカル・トレーニングをした後、それぞれのコーナーで、いかにパフォーマンスを展開するべきかをジルさんが、個々にアドバイスしていった。用意されたショート・ストーリーを整理して効果的なエピソードにすること、品物のレイアウトを完成させること、対面した相手をコントロールし、イニシアティブをとり続けることなどがアドバイスされた。

■　10 月 15 日（土）17：00 ～ 21：00　会場　芸能花伝舎（B1a）
ワークショップ　『SONS AND DAUGHTERS』4 日目　講師　ジル・グリーンハーフ

発表に向けた実践

■　10 月 16 日（日）13：00 ～ 17：00　会場　芸能花伝舎（B1a）
ワークショップ　『SONS AND DAUGHTERS』5 日目　講師　ジル・グリーンハーフ

成果発表

レクチャー「演劇における今日の女性問題とマグダレーナ・プロジェクトの果たす役割」
講師　ジル・グリーンハーフ　／　ゲスト　吉村桂充（上方舞友の会）／　司会　篠本賢一

ジル・グリーンハーフ氏が主宰する「マグダレーナ・プロジェクト」の活動の紹介。世界中のパフォーマーが、女性であるということの問題などをテーマにして、様々な表現を発表している様子がが映像で提示された。

◆　講師プロフィール ◆

ジル・グリーンハーフ　／　Jill　Greenhalgh

1955 –
ジル・グリーンハーフ氏は、ウェールズの出身の演劇人である。1979 年から 1986 年まで、ウェールズの首都カーディフの実験劇場で活動した後、1986 年に「マグダレーナ・プロジェクト」を設立する。これは、現代演劇における女性の国際ネットワークで、ヨーロッパをはじめ、アフリカ、南米、アジアなど広範なネットワークをもち、「フェスティバル」を開催する団体である。ジル・グリーンハーフ氏は、自ら演劇作品を創造する一方、「マグダレーナ・プロジェクト」の創設者として各国をめぐり、それぞれの地域の問題の個別性と共通性を広い視野で考察しつつ、演劇人として、女性として、生きていくことの問題に対し提言を行っている。

近年の「マグダレーナ・プロジェクト」の主な開催場所：ブラジル / ドイツ/ ニューヨーク/ エクアドル / キューバ / イタリア/ スペイン / デンマーク / チリ/ インド/ ウェールズ / メキシコ

1日目　2016年10月12日（水）17：00 ～ 21：00　会場：芸能花伝舎

ワークショップ

●ジルの自己紹介
ウェールズから来た演劇人であり、「マグダレーナ・プロジェクト」のリーダーとして世界中で活動していること、今回のワークショップでは、初めての試みとして男性を加えたことなど。

● 参加者の自己紹介
参加者は、主に現役で活動している演劇関係者がほとんどである。1 名、舞踊家がおり、現役の女子大学生もいる。参加者全員を見渡すと、年代は 20 代から 60 代までで 30 代が比較的に多いが、全体としてはよいバランスとなっている。

● ジルからの質問
「なぜ、このワークショップに参加したのか？　」
・男女が手をむすぶべきだと考えている。
・集団創作に演出家として自己の課題を感じている。
・家族のことが題材となるのを知って初めは戸惑ったが、参加してみることにした。
・メソードにおいて解決したトラウマを使いなさいという演出家もいれば、解決していないトラウマを使いなさいという演出家もいる。どちらかを知りたい。
・親が演劇をやっていた。今回のワークショップは今までにないものだと感じ興味を持った。などなど。

○　ジル
お願いしていた物は持ってきましたか？ 家族につながる思い出の品物です。これは 4 日間のワークショップにおいて重要なアイテムになります。

参加者は、それぞれの品物を披露する。
実家からの郵送の手配でまだ届いていない参加者もいた。

○　ジル
ワークショップの時間外で連絡を取り合うことができる家族はいますね？

○　参加者
母親がアルツハイマーで施設に入居しています。

○　ジル
彼女のことをよく知っている人物でも構いませんよ。

○　ジル
1 つ目の課題は、『娘（または息子）です、私は、』これに続く短いフレーズを何も考えずにひたすら書き続けてください。思いつく限りのことを。細かいことを考えないようにどんどん書いてください。文法など正確でなくても構いません。恐れずに書いてください。繰り返しになっても構いません。

参加者は３分間、書き続ける。

○　ジル
次に、『娘（または息子）です、私は、こうなりたい』というフレーズで同様に思いつくままに書いてください。

参加者は、再び３分間、書き続ける。

○　ジル
では、いままで書いたものをそれぞれ読み返してみてください。声を出す必要はありません。黙読してください。そして、どのフレーズが重要で、どれが必要のないものか、選んでください。シンプルな使えそうなセンテンスを探ってください。使えそうなフレーズを 20 語ぐらいの長さで選びましょう。

参加者は、それぞれが作った言葉を精査する。

○　ジル
次に、皆さんに４つのグループに分かれてもらいます。男女が混ざった方がいいです。それぞれがほかの人の選んだフレーズをシェアしてください。

参加者のそれぞれのグループは、お互いの書いたフレーズをシェアする。
質問の内容、質問の言葉遣いなどをお互いに確かめ合う。
参加者は、それぞれの質問の確かめ合いを通じて、質問者自身の人間的な興味へもつながっていったように思える。

○　ジル
ワークショップのパートナーに母親を選んだ方、選ばなかった方、いろいろいますね。母親を選んだ方が９人、ほかは、兄弟、母親をよく知っている方、妹、祖母などでした。次の課題は、どうしても母親に聞きたいことを考えてください。但し、これはリハーサル用です。観客を伴ったパフォーマンスで使うことは多分しないでしょうから、安心してください。
例えば、母親に関することで聞きたい質問として、「どうして父を捨てたのか」というフレーズがあるとしましょう。これはとてもシンプルです。このように今まで聞くチャンスがなかったけど、ぜひ聞きたいことを考えてください。

○　ジル
では、皆さんのフレーズを聞いてみましょう。

○　参加者
僕が俳優をやりたいといったときにどう思ったの？

○　ジル
その質問で本当にいいですか？その言葉遣いでいいですか？あなたの思いを伝えるための言葉の的確さにこだわりたいですね。では、次の方。

○　参加者
いまのこの状態のおれをどう思う？

○　ジル
これはベストな質問の形でしょうか？もっと単刀直入に聞けませんか？あなたは、何が一番聞きたいのでしょう？

○　参加者
本音としては、僕の子供の顔は見たいか、ということが聞きたいのかもしれません。

○　ジル
　そうですね。では、別の方。

○　参加者
　お父さんをどう思っているか、お母さんに聞きたい。

○　ジル
　もっとクリアに。どうしてもその答えが知りたいですか？その答えを導き出す質問の仕方はどんな聞き方でいいのでしょうか？質問の正確さがどれほど大切か考えてほしいです。答える人がきちんと質問を理解するかどうか、という正確性です。質問の正確さというのは、質問が理解されるということです。質問するパートナーを怒らせたり、怖がらせたりしてもいけません。質問がきちんと伝わることが大切です。簡単な質問でははぐらかされてしまうかもしれない。うまく答えを導き出す質問を考えることが大切です。では、グループを変えてみましょう、助けになりそうな人と組んでみては。

　参加者は、グループを変え、同様にお互いのフレーズをシェアする。違った角度の質問などが生まれて、それぞれのフレーズの密度が濃くなっていくようだ。

○　ジル
　時間がもう無くなってきました。このワークショップは本当に時間がかかります。次の 24 時間の間にパートナーに質問して、その反応を記録しておいてください。パートナーがこのやり取りをパフォーマンスで使うということを了解していることも大切です。内容によっては、お互いが傷つけあって、ちょっと危険かもしれない。

○　参加者
　質問を完成させるのですか？

○　ジル
　そうです。何か質問はありますか。これから 3 日の間にほかにも使えそうなマテリアルを見つけていきます。パフォーマンスで使えるマテリアルです。最終的なパフォーマンスでは、個々の机に品物を置いて、観客が空いている席に座ります。そして、パフォーマーと向かい合います。そのやりとりをほかの観客が近くで聞くこともできます。基本的には 1 対 1 のパフォーマンスです。リアルなもの、自分の中からできてきたもの、本当に自分とつながっているもの、広がっていくものかどうかが大切です。

　初日は、自分が母親に何を求めているかを自動手記し、そこに羅列された文から本質的なものをピックアップし、短くて心に響くストーリーへとクオリティを高める作業をしました。

2 日目　　2016 年 10 月 13 日（木）17：00 ～ 21：00　　会場：芸能花伝舎

　まずエチュードとして、1 人ずつ観客の前で簡単な動きとセリフを使って、理想的なコミュニケーションとは何かが実習された。そこで最も重要なことは、観客をコントロールするということである。後半はひとりひとりに机が与えられ、思い出の品々を机の上に並べ、効果的なレイアウトを探求した。

　ウォーミングアップ

○　ジル
　5 分間、体を温めましょう。それから、心と体を一体化させましょう。

　参加者は、それぞれにそれぞれの動きでウォーミングアップをする。

〇　ジル
　心と体を一緒に保って、周りの人たちを引き付けることができますか。簡単なこと、小さなことをやっているときでも観客の目を、私の視線を意識するようにエクササイズしてください。ゆっくりていねいに。リズムをどうしたらいいか、考えながら、私の目を引き付けるようにしてください。

　参加者の動きが活性化してくる。

〇　ジル
　あと２分間やりましょう。部屋の中で自分にとっていいスペースを見つけてください。そして、想像してください。頭の上の方から、細い線があなたをひっぱっている。そこからぶらぶらゆれている。目を閉じて。あなたの中心線を感じて。リラックスしてください。
　前後左右に動くときでも上から引っ張られている感覚を失わないように。

　参加者、ゆっくりと動く。

〇　ジル
　集中力を保ってください。もし目を開けてしまおうと思ったら開けても構いません。自分を縛らないように。今から別のイメージをお伝えします。前に動くときも後ろへの感覚を大切にしてゆっくり歩きます。後ろへ動くときも前への感覚を忘れずに。上への感覚は保ったままです。足はパラレルに。

　ジルは、参加者１人１人を回り、背中を押す。
　その時後ろへ下がる逆の感覚をもつように指導する。

〇　ジル
　2 人組になりましょう。1 人が前に行こうとしたら、パートナーは前から押します。少しやったら離れます。その時に動く方は押されていた時の感覚を保ちます。このムーブメントは日本の身体表現からヒントを得ました。

　参加者は、2 人組でしばらく続ける。

〇　ジル
　上から、下から、前から、後ろから、この４つの方向の感覚を忘れないようにしてください。緊張感を保ってください。パフォーマンスをするときに、これがあるだけで全然違います。さて、今度は 1 人ずつ、やってみましょう。この部屋のなかに周りに他人がいるということを忘れないように。
　いつも 4 つの方向性を意識して。参加者は、それぞれ動く。

〇　ジル
　皆さん、そこで止まって、目を閉じて。さて、A さんはどこにいるか、指をさしてみて。

　参加者は、A の方向に指をさす。

〇　ジル
　また目を開けて動き始めて。……B さんはどこ？

　参加者、B を指さす。これを繰り返す。

〇　ジル
　今感じている感覚を常に持っていてほしい。次はシンプルだけど難しい課題です。部屋をかたづけて、集まってみましょう。
　課題のやり方は、1 人がドアから部屋に入ってきて、場所を探します。好きな場所を探します。観客の目を一番引き付けられるという場所を探します。そして、こんにちは、と言います。それから、私の名前は〇〇と言ってから、即興で、何かを言います。あなた自身のことを何か、観客の気を引き付ける何か、11～15 文字ぐらいのことを言います。短い言葉です。言うことを考えすぎてはいけませ

ん。場所に来るまでに何を言うか決めてはいけない。場所に立った時にものを言います。言い終わったら、ありがとうと言って、ドアから出ます。これが一連の動き、ドアが動いてからドアから出るまで、観客と私（ジル）の気を引き付け続けることができるでしょうか。これが課題です。何か間違ったり、段取りが違ったりしたら、もう一度やらせますからね。

ジルのデモンストレーション。

〇　ジル
この課題で必要なのは、初めから終わりまで私（ジル）の気を引き付け続けることです。そして、観ている皆さんは良い観客でいてください。……シンプルな課題ができていることがうまくいっているときは、よく分かります。なぜ、うまくいっているかが分かります。
これがこの課題の重要なところです。では、3 人ずつやってみましょう。
参加者の 3 人が廊下に出る。1 人 1 人、部屋に入り、決められたセリフ「こんにちは」「私の名前は、〇〇です」「〇〇〇」「ありがとうございました」を言って、部屋から出る。

〇　1 人目の参加者
ちょっと困っちゃった。ありがとうを言い忘れ、ストップしてしまいました。

〇　ジル
それは観客に意識を向け、集中していないからです。ではもう一度やってみてください。

2 度目のチャレンジ、舞台の上手前に立つ。

〇　演じる参加者
今、ちょっと怖いです。

〇　ジル
その感覚を覚えておいてください。では次。

2 人目、センターに立つ。自然に笑顔になる。「最初に目の前の人と目があって笑ってくれたのがうれしかったです」とコメント。

3 人目も同様にエチュードを行う。

3 人の感想。

〇　1 番目の参加者
1 回目と 2 回目で感情が変わった、2 回目は怖かった。2 回目のほうが怖いのは、バンジージャンプに似ていると思った。

〇　2 番目の参加者
最初、視線にうそを感じて、目をはずした。次に目が合って安心した。

〇　ジル
いかがですか。皆さん、役者さんなのにうまくいきませんね。

〇　3 番目の参加者
受け入れられているかどうか、確認したかったが、うまくいかなかった。

〇　ジル
では、今やってくれた 3 人について、皆さんにはどうだったかを言ってください。名前を言う必要はありません。どの瞬間がうまくいって、うまくいかなかったということを皆さんで話してください。

これは、意見というよりも単純な事実として言ってください。感想ではありませんよ。事実を言うのです。どこがうまくいっていたかを言います。皆さんが誰かのパフォーマンスを見ているときに何が起きているか考えなければいけません。

〇　観ていた参加者の意見
　「同じ人ですが、居心地のいい場所を探している時は存在感がなかったが、場所を決めたら存在感が増した」「探しているときに、何をしているんだろうということが気になった。ありがとうのあと、気が抜けたような気がした」「3 人とも、ありがとうを言った後は逃げていくように去ってしまった」「長く待っている間に失われていくものがあった。観念して動き始めたときに関心が持てた」など。

〇　ジル
　頭を空っぽにするのではなく、何か考えを持っていると観客の関心を引きます。3 人とも自分に関することでコメントがなかった。つまり、他者に向けた発言がなかった。そこが問題です。その瞬間のフィーリングを言っただけでは自己表現はできない。そこが重要です。本当のことが表現されていることが重要で。私は作り物の演技が嫌いです。では、別の人にやってもらいましょう。

〇　他の参加者の追加セルフ
　「明日、入れてきます（抜けた歯をさす）」「今日、オーデションが二つあって、二つ目のオーデションですごい人に会っちゃいました」「昨日、アマゾンからすごいカメラが届きました」「わたし、あの人好きなの」

〇　ジル
　どうでしたか？

〇　演じた参加者
　「よくわからなかった」「楽しかった」など。

〇　それに対する観客の意見
　「失敗したそのあと、正直な表情が見えたことが興味深かった」「何かアクシデントがあった時、その人らしさが出た」「こんにちは、と言われたとき、私たちがいても演者の内面が変わらないと感じました。ことばが私にかかっていないような気がしたからです」など。

〇　ジル
　作ったセリフは長すぎてはいけません。できれば、ワンブレスの長さで。1 番目の彼は、神経質になっていました。震えている瞬間は、自己をコントロールできてないのです。それを観客が見てしまうと心配してしまう。彼は、私たちの関心を引き付けていない状態でした。自分で震えようと決めるのはいいが、体が勝手に震えてはいけないのです。2 番目の方は、あの机に座るまでは十分だったのですが、そのあと自分の課題を忘れてしまった。セリフを言った後に、心が観客から逃げてしまった。普通、ギフトをあげたら、それを与えた確認を取りますよね。最後の方は、本当に自分の立つ場所を探していましたか。探している姿を見せようとしていませんでしたか。テクニックの陰に隠れてしまっていた。私たちを見ていなかった。どこか遠くを見ていましたね。
　こんにちは。私の名前は〇〇です。私にとって最も大切なのは〇〇です。ありがとう。ただこれだけのセリフですが、世界中でこのワークショップをやっていると皆さん、難しさを感じるようです。私は、普段は女性とこれをやっていますが、皆さん、観客を怖がります。どうしてでしょう。今これが大切だということを主張する権利が与えられているのに。それができないのです。いつもワークショップが進むにつれて、できない、できないと弱音を吐くことが多いのですが、皆さんは最後まで頑張ってください。

　エチュードが再開される。

　演じる参加者はそれぞれ思い思いの場所に立ってパフォーマンスをする。「私にとって大切なのは、生きているということです」「私にとっても最も大切なのはハゲです」（観客爆笑）「わたしが汚くないことです」など。

○　ジル
　皆さん、どうでしたか？あなたは、ちょっと泣きそうになりましたね。なぜです？

○　参加者
　人の目をこんなにまっすぐに感じたことがなかったからです。

○　ジル
　怖がらずに自分で意志をもって発言できるように。これはセラピーではないですよ。（別の人に）あなたはいかがでしたか。

○　演じた参加者
　普段舞台では感じない、緊張感がありました。ここから逃げ出したいというのがわかっちゃいましたね。でも扉を開けたら楽になりました。

○　ジル
　みんなの感想はどうですか？何がうまくいくのか、うまくいかないのかを正確に言ってください。好みではないのですよ。

○　観ていた参加者
　「立つ位置を決めたのかな、と思ったら、一歩下がっちゃったので、距離ができたと思います。僕らから引いてしまったような気がします。別の言葉で言うと、プレゼントを渡そうとした瞬間に引っ込めてしまったような気がします」「逃げてしまった人がいた。私たちがもらったものをつなげる時間をくれなかた。反芻する時間をくれなかった。イメージする時間がなかった。自分自身が作りだしたものを自分自身のものにし切れなかった。その時間を与え、観客からのフィードバックを感じてから、ありがとうと言うべきです」など。

○　ジル
　さあ、次の人たち、やってみましょう。

　次の 3 人の参加者のセリフ「私にとって大切なのは、みんなと触れたいということです」「私にとって大切なのは、今、この時です」「私にとって大切なのは、生きている、でも死んでいます」など。

○　ジル
　みんなが違うエネルギーだった。すばらしいと思いませんか。独創的で素敵な感じがありますよね。自分で感想を言ってみてください。

○　観ていた参加者
　「こわかったな。あれが精いっぱいだった」「正直楽しかった。単純には板の上は楽しいと感じた。やりすぎだった感があったけれど」「この場で考えるということが難しかった。でも、死んでいますは、その時に感じたことが正直に言えた」

○　観客の参加者の意見
　「怖いという思いと戦っている感じが、よかった。怖いと思っていることは分かったが、そこと戦っていることが心に響いてきた。時間を十分に使っていた」「本人の中で本当に心が動いているときは印象を深く感じられる。いい声だなと思った時はもう飽きている」「自分の中が本当に動き出すためにどこかで自分自身を手放さなければいけない。自分の中で起こっていることを見つめる、というか」

○　ジル
　それが俳優のコントロールということです。若かった頃、綱渡りをしたことがあります。
行って帰ってくることができるようになるまでに 2 週間かかった。考えすぎてしまうと落ちてしまうし、でも十分考えておかないとこれもまた落ちてしまう。

何か、観客にとって重要なことを言うことが大切ですが、まずは、私は自分自身に興味があります。それを発言する。私にとって、何が重要で何に興味があるかがわかるということがいい劇場です。お母さんのことは話すときも、観客に観客自身のことを考えてもらうことが大切です。もう１度、別の方でやりましょう。その前に、アドバイスをします。言い出す前に考えてください。何が一番重要かということを考えてください。つまらないことは言わなくてもいいのです。では始めましょう。

○　演じる参加者のセリフ
「私にとって大切なのは、このことだっていうことを見つけて（長い沈黙）楽しくやることです」「私にとって大切なのは、父が愛した音楽を失わないことです」「私にとって大切なのは、私を必要としてくれている人がいることです」「私にとって大切なのは、優しい気持ちを忘れないことです」など。

○　ジル
どんどんパフォーマンスの質が高くなっていきます。

○　観客の参加者
場所を探している気がする。その時に考えているという気がした。

○　ジル　考えているときに観客としてひきつけられました。そう感じましたけど。本当に考えているときは、私たちは息をのんでしまう。考えていることを見せていると興味を失ってしまうのです。

○　観客の参加者
「行為を足しているような気がするときは、興味を失ってしまう」「衝動というよりは、アイデアを見せたときに残念だった」「コントロールは必要だが、コントロールにもいろいろな種類がある。コントロールすべきところとそうでないところを見極めることが必要。台本があるときは、いつもこの問題が起きている」「遊び心のあるものには引き付けられ、まじめなだけのものには、十分な集中力があっても、お互いに似通ってきている。まじめなだけのものには引き付けられない」「創作セリフのコメントに厚みがあったが、ドアをあけて場所を決めるまでが薄かった。それがきちんとしていなければ聞いてもらえないのではと思った」

○　演じた参加者
演じた参加者 その場で考えろということがうまくいかなかった。

○　ジル
私は、日本語が分からないのだけれど、息を詰めている長い時間、引き付けられた。なぜなら、時間と戦っている、演技をしないようにしていることがよく分かった。リスクを背負って綱の上に立っていた。

○　演じた参加者
１回目と違う声が出た。見える風景が違っていた。具体的なものが見えていた。ことばが震え、おじぎで少しふらついた。

○　ジル
あなたの今のパフォーマンスは美しかったです。もっと長い時間をかけて、フィードバックをもらってもよかったかもしれません。

○　演じた参加者
ジルさんの方に吸い寄せられた。

○　ジル とてもいい言葉だった。すばらしいことです。あなたの言葉は、みんなに何かを考えさせてくれた。いいギフトだったと思います。

○　演じた参加者

　コントロールが難しいタイプだと自分を感じた。皆のものを見ていて考え方を変えた。自分のなかの流れていく感覚をコントロールできなかった。ある瞬間はよかったが、ある瞬間はバラバラだった。

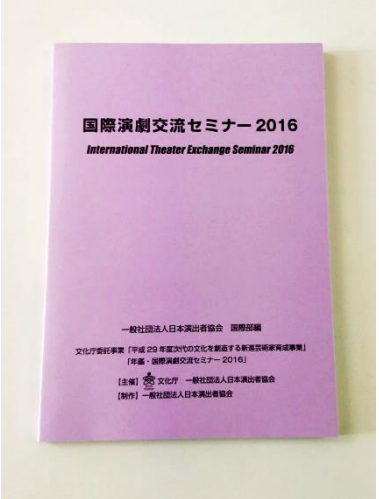
○　ジル

　そのいい時を続けられるようにしましょう。パフォーマンスの時、私たちは知っていますが、観客にとってそれが初めてのように感じられなければならないのです。ウォーミングアップはこれで終わり。

続き、詳細は、国際演劇交流セミナー2016年鑑にて

国際演劇交流セミナー2016

――― 年 鑑 ―――



■ 目　次　Index ■

メ キ シ コ　特集 – リーディング・レクチャー・シンポジウム ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
アフガニスタン特集 – ワークショップ・リーディング ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
韓　　国　特集 – ワークショップ・レクチャー ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77
マ カ オ　特集 – ワークショップ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・113
ウェールズ　特集 – ワークショップ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・135
イ ギ リ ス　特集 – ワークショップ・レクチャー ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・153
国際演劇交流セミナー実施年表【1999 年～2016 年】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・214

■　ご希望の方は、日本演出者協会 事務局までご連絡ください。

TEL:03-5909-3074 ／FAX:03-5909-3075

E-mail: j_d_a_info@yahoo.co.jp